

第4回日立市原子力安全対策懇談会会議録

1 開催日時

令和2年2月17日（月）午前10時から正午まで

2 出席者

- (1) 委員 12名
- (2) 日本原子力発電株式会社 10名
- (3) 事務局 9名

3 内容

(1) 東海第二発電所視察

ア 視察概要説明（説明：日本原子力発電(株)）

イ 現地視察

(ア) 使用済燃料乾式貯蔵施設

(イ) 防潮堤基礎工事状況等

ウ 質疑

4 当日配布資料

第4回日立市原子力安全対策懇談会資料

5 発言内容

第4回日立市原子力安全対策懇談会会議録

発言者	発言内容
委員	<p>ドライキャスクの保管施設を見せていただいたのですが、使用済燃料プールと比較して、ドライキャスクを使用した場合のメリットやデメリットはあるのでしょうか。</p>
日本原電	<p>原子炉建屋内にある使用済燃料プールは、原子炉からの燃料の出し入れに絶対必要なもので、どこの発電所にもございます。</p> <p>そこがひっ迫して、追加で何か造ろうとした時に、プールタイプの別な物を作るか、今回御覧いただいたドライキャスクのような物を作るかということになるかと思いますが、今はドライキャスクタイプの物を造っている所が多い状況です。</p> <p>福島第一原子力発電所事故の経験を踏まえますと、国の委員会なども、どちらかと言うとドライキャスクは輸送、貯蔵兼用という言い方をしております、我々が採用しているものは貯蔵しかできないキャスクのタイプですが、輸送もできるタイプにしていれば、一旦は貯蔵しますが、そのまま再処理施設に持っていくことができるといった方向性も出されておまして、そのようなタイプの物を採用していくことが最近の動きになっています。</p>
委員	<p>使用済燃料は、六ヶ所村に貯蔵してあると思うのですが、そこが満杯状態という意味でしょうか。それとも、発電所内にある間は、あのような保管状態にしないといけないということでしょうか。</p>
日本原電	<p>六ヶ所村の施設でも、一旦、プールタイプの施設で、各発電所からの使用済燃料を受け入れて、それから再処理して、リサイクルされプルトニウムやウランと、高レベル放射性廃棄物に分けられていくのですが、まだ再処理というプロセスに入っていないということ、御指摘のとおり、かつて搬入された核燃料の再処理のプロセスが進んでいない状況で、プールの容量が満杯に近づいているということは伺っております。</p> <p>各発電所からの搬出が難しい状況で、各発電所で仮保管する対応を進めざるを得ない状況ではあります。</p>

第4回日立市原子力安全対策懇談会会議録

委員	<p>貯留堰の設置について、従来の設定の基準でも引き波の後も健全性は確保されることになっていたと思うのですが、新たに貯留堰を設置するのはどういった要件になったからでしょうか。</p>
日本原電	<p>新規制基準では、津波の高さのほか、引き波についても従来より厳しくなっています。</p> <p>従来は、貯留堰がなくても、引き波でそこまで水位は下がらないと評価されていたものが、新規制基準では、引き波での水位がより低くなる評価となったため、貯留堰で取水口の一部を囲ってポンプ（取水）面の海水位を一定時間確保する、そういう評価に則り対応するものです。</p>
委員	<p>あいさつの中で、安全性向上対策の工期が延びるという話がありましたが、その理由は、簡単に言うとどういったことでしょうか。</p>
日本原電	<p>工事は、2014年に設置変更許可の申請をさせていただきましたが、工事完了時期を当初予定の2021年3月から、2022年12月へ1年9箇月延ばすことになりました。</p> <p>設置変更許可申請した当時の見積りから、詳細設計が進んできて、さらに御覧いただいたように工事が進ちよくし、具体的な施工をしてまいりましたら、当初、我々が掲げていた工期では厳しいということがこの時点で分かってきたところです。</p> <p>そのような形で工期延長をさせていただきました。</p>
委員	<p>工期が遅れる原因となっているのは、具体的に何でしょうか。</p>
日本原電	<p>原因は一つという訳ではなく、防潮堤の設置工事ですとか、フィルターベントですとか、高圧代替電源装置等が主な要因です。これは、干渉する工事ですとか、エリアの調整、また、工事計画認可の申請時と認可時で内容に違いがあり、それらの検討を進めた結果、当初の予定より工期を延ばさざるを得なくなったものでございます。</p>